

友達と一緒に試行錯誤を繰り返し、気付きの質を高める学習活動

第2学年「うごく うごく わたしのおもちゃ」の実践を通して

阿南市立岩脇小学校 教諭 笠谷 祐芽子

1 はじめに

本学級の子どもたちは、何事にも興味関心をもって取り組み、自分が見付けたことや気付いたことを友達や教師に積極的に伝えようとしている。また、工作や絵を描くことも好きで、身近にある材料を用い、自分なりに工夫して創作活動を楽しんでいる姿が見られる。一方で、初めは「やってみたい」と思っているが、分からないことやできないことがあるとすぐに諦めてしまう子や、友達や教師に尋ねることや頼ることもできないままにいる子もいる。一人一人が、対象とじっくり関わり、何度も試したり考えたりしながら、自分の思いや願いを実現し満足感や達成感を味わってほしいと願う。

本単元には、遊び自体を工夫したり、遊びに使うおもちゃを工夫して作ったりして自然の不思議さに気付くとともに、友達と楽しみながら遊びを創り出す面白さがある。そこで、友達と関わりながら試行錯誤を繰り返す中で、気付きの質を高める学習活動の充実を目指し、本主題を設定した。

2 研究の内容

- (1) 題材や素材との出会わせ方を工夫する
- (2) 思いや願いが共通する児童同士でグループを編成する
- (3) 活動に没頭できる場や、交流やアイデアが生まれる場を確保する
- (4) 様々な他者と繰り返し交流できる機会を設定する

3 活動の内容

- (1) 題材や素材との出会わせ方を工夫する

【題材との出会わせ方】

単元導入前に学習への関心をもたせたいと考えたため、教室の一角に「動くおもちゃコーナー」を設けた。子どもたちは、おもちゃに興味津々で、すぐに手に取って遊び始めた。思い通りに動かなくて困ると、「こうするんよ」「あ、そうか」と友達同士で声を掛け合いながら遊んだり、動く仕組みに疑問をもって本で調べたりするなど、早く自分のおもちゃを作りたいという思いが自然に高まっていった。

【素材との出会い・素材を使った自由遊び】

導入では、動力となる輪ゴム・うちわ（風）・電池（おもり）と紙コップなどの材料を組み合わせ、自由に遊んだり動きを試したりする時間を設けた。子どもたちは「どうしたらおもちゃが動くのか」とその仕組みを考え始め、教師や友達に問いかけて、作っては試してみる姿が見られた。

活動に必要な材料や道具については、みんなで話し合って持ち寄ることとした。また、子どもたちが思いや願いを実現しやすいよう教師が予め見通しをもって準備するとともに、保護者にも伝えて収集をお願いした。



- (2) 思いや願いが共通する児童同士でグループを編成する

【作りたいおもちゃの自己決定】

素材遊びによりおもちゃ作りへの思いが高まったところで、自分の作りたいおもちゃの動く仕組みを決めてアイデア図を描いた。自分の作りたいおもちゃが決まったことで、おもちゃ作りへの意欲がさらに高まり、さっそく動く仕組みを考えながら自分で制作する子もいれば、本で調べて作り始める子もいた。その中で、仕組みが似ている子どもたちが自然と集まり、おもちゃを見比べたり手に取ったりしながら活動する姿も見られるようになった。

【グループ編成の工夫】

普段はすぐ諦める子や周りに相談することが苦手な子も、近くで同じ仕組みのおもちゃを作っていれば気付きを伝え合いながら取り組むことができると考え、グループを編成した。おもちゃ遊び自体楽しいことだが、そこに友達との関わりが加わることでさらに楽しく活動する姿が見られた。そして、出来上がったおもちゃで一緒に遊ぶことで「自分にも作れる」という自信も生まれた。

グループ活動では、話し合いで決まったリーダーを中心に計画を立てた。よりよいおもちゃ作りのために相談し合って活動したことで、よりグループに一体感が生まれた。

(3) 活動に没頭できる場や、交流やアイデアが生まれる場を確保する

【交流やアイデアが生まれる場】

広い空間で思い切りおもちゃを動かすことができれば、より活動に没頭できると考え、活動の場を体育館とした。

子どもたちは、ダイナミックにおもちゃを動かすことで、教室では気付かなかったアイデアを思い付くとともに、グループ間を自由に行き来し意見を交換し合うことで改良のヒントを得ることができた。また、遊び・振り返り・改良を一カ所でできるため、おもちゃを作っては試し、改良しては試すという一連の活動を切れ目なく、繰り返し行うことができた。壁面の孔がヒントになり、割り箸を差して射的に変身させるなど体育館ならではの発想も生まれ、遊び方の幅も広がった。



(4) 様々な他者と繰り返し交流できる機会を設定する

【学級から学年へ】

学級内ではおもちゃの改良に関するやりとりが中心だったが、隣の学級の友達を招待した際には、遊び方やルールに関するヒントやアイデアを教えてもらい、より楽しめる方法をめざして一層工夫を重ねるようになった。例えば、車のおもちゃでは、風でゴールまで走らせる遊び方からペットボトルを倒して得点を入れる遊び方に進化させるなど、交流から得た気付きを試行錯誤しながら形にしていっていった。

【先生との交流 そして1年生招待へ】

活動に関わってくださる先生方には、一人一人に声掛けをお願いした。「すごい」「これはどうやったの」という言葉が大きな励みとやる気につながった。

また、1年生を招待する準備に取り組む中で、子どもたちから招待状を兼ねたPR動画を作りたいという声があがり、タブレットを活用して動画を作成した。当日は、動画を見てわくわくしている様子の1年生を見て、2年生のやる気や思いもより高まり笑顔で交流することができていた。招待後には、嬉しい言葉や手紙をもらい、満足感や達成感を味わうことができた。



4 研究の成果と今後の課題

今回の実践を通して、教師が学習材や素材との出会わせ方や活動を支え合うグループ編成を工夫することで、子どもたちは思いや願いを大切にしながら活動に取り組む姿が見られた。また、適切な活動場所を設けたり他者との交流機会を意図的に設定したりすることで、活動にじっくりと浸り、友達と一緒に試行錯誤ながら自らの気付きの質を高めていくことが分かった。一人一人を丁寧に見取り、適切に声を掛けることは、子どもたちが達成感や自他の成長やよさを感じることにつながり、教師の大切な役割の一つであることも実感した。

課題として、学級経営の基本として本単元の活動にも取り入れたグループ活動で、グループでの成長は大きかったが、もの作りが得意な児童の考えが優先され、「わたし」のおもちゃが「わたしたち」のおもちゃになる場面もあった。アイデア図や振り返りカードに自分の思いや新たな気付きが具体的に表現できるよう工夫し、教師がその思いに寄り添いながら支援したり個々のよさやすばらしさを全体で共有したりすることで、一人一人の成長への気付きを確かなものにしていきたい。